

# 療育施設を利用している発達障害児（疑い含む）の父親の育児実態調査 ～父親・母親の比較検討～

石田史織、奥野ひろみ、五十嵐久人、高橋宏子、山崎明美

信州大学医学部保健学科

**目的：**発達障害児（疑い含む）をもつ父親に見合った支援を検討するため、父親と母親の育児の実情や意識等の共通点・相違点を明らかにすること。

**方法：**長野県内で未就学児（0～5歳）を対象に療育を行う療育施設（39施設）を利用する児の父親と母親合せて470名を対象に自記式調査紙郵送法で調査を行った。調査内容は、基本属性と「発達障害児の育児の意識と抱える問題に関する16項目」（小項目：意識3項目、ストレス8項目、不安5項目）、「発達障害児の理解と対応に関する28項目」（小項目：発達障害児（疑い含む）の理解と心がけ8項目、発達障害児（疑い含む）の特性・特徴に関する認識13項目、発達障害児（疑い含む）の特性・特徴への対応方法7項目）について調査した。

**結果：**186名（39.6%）より回答があり、うち父親78名・母親88名計166名（39.6%）を分析対象とした。父親と母親を比較した結果、「発達障害児（疑い含む）の育児の意識と抱える問題」に関する項目では、意識に関する2項目、ストレスに関する4項目、不安に関する3項目で有意差がみられ、どれも父親群が有意に低かった。「発達障害児（疑い含む）の理解と対応」の項目では7項目、「発達障害児（疑い含む）の特徴への対応方法」の項目では2項目で有意差がみられ、どの項目も父親群が有意に低かった。

**考察：**父親の育児状況は、母親同様に発達障害児（疑い含む）を理解しようと努力しているが、労働状況など社会的背景において、日常における子どもの成長や発達障害の理解が困難であることが示唆された。また、療育のスキルが十分に得られない状況にあることが予想された。このような状況を改善することは、母親や家族全体の支援にもつながるため、社会全体の体制整備に加え、父親のライフスタイルや特性に合わせた取り組みが急務である。

**Key words：**発達障害児（children with developmental disorders）、家族支援（family support）、父親（father）、療育（medical treatment and education）、育児（parenting）

## I. 背景

発達障害児の育児は、定型発達児の育児と比較すると、親の育児負担や不安は特徴的で、それに見合った支援の必要性や重要性は高いと言われる<sup>1) 2)</sup>。

発達障害者支援法（平成17年施行）にも、発達

---

（2019年5月30日受付 2019年9月2日受理）

連絡先：〒390-8621 長野県松本市旭3-1-1  
信州大学医学部保健学科広域看護領域公衆衛生看護  
石田 史織  
E-mail：shioriis@shinshu-u.ac.jp

障害の早期発見・早期支援に努め適切な措置を講じ、家族も重要な支援者として障害受容や発達支援方法には十分配慮した支援を行うこととされている<sup>3)</sup>。また、同法は平成28年法改正により従来から実施しているペアレントトレーニング等の実施に加え、発達障害児者の家族同士の支援の推進等、家族に対する支援が強化され、発達障害児支援の中でも重要な位置づけとされている。しかし、育児を中心とした家族への支援に関する先行研究では、母親を対象としたものが多く、父親を対象とした検討が十分でない。

また、母親を対象とした先行研究では、発達障害児の家族支援において、父親が発達障害児・母親

(配偶者)・発達障害児のきょうだい・他家族員・社会など様々な対象と良好な関係性をもつことが重要だと述べられている<sup>4) 5)</sup>が、そのような良好な関係性を構築するための父親の発達障害児への具体的な関わりについては明らかになっていない。亀崎ら<sup>6)</sup>は、未就学児を持つ父親の4人に1人が育児困難感を持っており、母親のように継続的な支援を受けていない父親たちは、子どもの成長・発達に伴って育児への自信のなさや心配が生じることが予測されると報告している。また、定型発達児の育児に比べ、発達障害児の育児はより困難さを抱える<sup>7) ~10)</sup>と言われており、発達障害児(疑い含む)をもつ父親たちも同様に不全感や困難感を抱えている可能性が高いと考えられる。そのような状況は、子どもの健やかな成長・発達を阻害すると共に、親も充実した子育てができない状況であり、打開策が必要とされる。

そこで、療育が必要とされる児の父親に見合った支援を検討するため、本報では父親・母親間の育児の実情や意識等を比較検討し、共通点や相違点を明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

### A. 対象及び調査期間

長野県内で未就学児(0~5歳)を対象に療育を行う療育施設を利用する児の父親と母親を対象に自記式調査紙郵送法で調査を行った。調査前に各施設長へ調査協力と調査対象人数の報告依頼を行い、施設長より承諾を得られた8施設を対象とした。承諾を得た後、対象施設に該当人数分の調査票を送り、返信をもって本人の承諾を得た。

調査期間は、2016年7月~9月であった。

### B. 調査方法

#### 1. 調査内容

調査内容は、基本属性と育児に関する実態や思いについて、先行研究や文献を参考にb. 発達障害児の育児の意識と抱える問題に関する16項目(小項目:意識3、ストレス8、不安5)、c. 発達障害児の理解と対応に関する28項目(小項目:発達障害児(疑い含む)の理解と心がけ8、発達障害児(疑い含む)の特徴・特性に関する認識13、発達障害児(疑い含む)の特徴への対応方法7)を作成した<sup>11) ~13)</sup>。いずれも4件法(とてもあてはまる、まああてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない)とした。項目の詳細について以下に示す。

#### a. 基本属性

父親・母親の状況(年齢・学歴・就労状況・健康状態)

#### b. 発達障害児の育児の意識と抱える問題(16項目)

##### (1) 意識に関する3項目

- ・育児に積極的に関わっている
- ・可能な範囲で育児に関わろうと努力している
- ・父親、母親ならではの育児をしようという意識がある

##### (2) ストレスに関する8項目

- ・子どもの成長を感じられないことがストレス
- ・子どもの困った行動に対してうまく対応できないことがストレスを感じる
- ・他の子と比較し我が子を否定的に思ってしまうことにストレスを感じる
- ・配偶者との育児の方向性が異なることにストレスを感じる
- ・ワークライフバランスがうまく保てないことにストレスを感じる
- ・我が子に対する社会の差別的意識にストレスを感じる
- ・自身が持つ発達障害への差別的意識にストレスを感じる
- ・配偶者の育児が不十分なことにストレスを感じる

##### (3) 不安に関する5項目

- ・子どもとの関わり方について不安に思う
- ・子どもの今後の成長が不安に思う
- ・自身の仕事による子どもへの影響が不安に思う
- ・子どもの就園・就学後の生活が不安に思う
- ・将来自立した生活が送れるかどうか不安に思う

#### c. 発達障害児の理解と対応に関する項目(28項目)

##### (1) 発達障害児(疑い含む)の理解と心がけに関する項目

- ・子どもが喜ぶことを知っている
- ・子どもが頑張っていることを知っている
- ・子どもの得意なことを知っている
- ・子どもの好きなことを知っている
- ・子どもの頑張りや努力を誉めてあげたいと思う
- ・子どもの成長を促すかわりを心がけている
- ・子どもに合わせた対応をとるように心がけている
- ・子どもを理解しようと努力している

##### (2) 発達障害児(疑い含む)の特徴・特性に関する認識

- ・対人関係のトラブルがある

- ・コミュニケーションがとれない
- ・言葉が出ない
- ・パターン化した行動がある
- ・不注意
- ・こだわりが強い
- ・意思疎通が困難
- ・パニック
- ・感覚過敏
- ・集中力がない
- ・集団行動がとれない
- ・衝動性
- ・多動性

(3) 発達障害児（疑い含む）の特徴への対応方法

- ・叱責する
- ・体罰を与える
- ・関心・注意を他に向ける
- ・子どもが嫌いな活動（感覚）等から逃れさせる
- ・子どもが好きな行動（感覚）を行う
- ・要求か気を引く行動か判断し気を引く行動であれば無視をする
- ・自らがその場を立ち去る

2. 分析方法

Mann-Whitney U 検定で父親・母親間比較とし、 $p < 0.05$  を有意とした。父親群と母親群で子どもの理解（認識）、育児状況について比較し、父親と母親の差異や共通点から父親に焦点をあてた家族支援について検討した。

統計処理は SPSS Statistics 22.0 for Windows を用いた。

C. 倫理的配慮

対象者には、研究目的及び方法、匿名性、研究の参加の自由と不参加でも不利益が生じないこと等を文書で説明した。アンケート用紙は無記名とし、基本属性情報以外の個人情報記載は記載しないこととして、連結不可能匿名化された情報のみを取り扱う。また、研究の目的以外に、研究で得られた被験者の試料等を使用しないことも記した。なお本調査は、信州大学医倫理委員会の承認（No. 3448）を得て実施した。

III. 結果

A. 回答状況

父親・母親合わせて 470 人に配布し、186 人より回答があった（回収率 39.6%）。全回答のうち記入漏れなどない 166 名を分析対象とした（有効回答率

35.3%）。166 名の内訳は、父親 78 名・母親 88 名であった。

B. 対象者の属性

表 1 に対象者の基本属性を示した。父親は 78 名で平均年齢は  $40.0 \pm 6.1$  歳であった。母親は 88 名で  $38.0 \pm 5.3$  歳であった。学歴は父親の 52.6% が大学卒以上、26.9% が専門学校・短大卒、20.5% が高卒であった。また、母親の 47.7% は専門学校・短大卒で、34.1% が大学卒以上、18.3% が高卒であった。就労形態は、父親は対象者全員が就業しており、母親は 52.3% が就業、47.7% が「就業していない」と回答した。健康状態は、父親の 91.0% は「良い」と回答し、他「どちらともいえない」が 9.0% であった。母親は、「良い」と回答した者は、83.0% で、「どちらともいえない」が 13.6%、「悪い」と回答した者が 3.4% であった。（表 1）

表 1 対象者の基本属性

	父(N=78)	母(N=88)
年齢 <sup>1)</sup>	40.0±6.1	38.0±5.3
学歴 <sup>2)</sup>	高卒	16(20.5)
	専門学校・短大卒	21(26.9)
	大学卒以上	41(52.6)
就労状況 <sup>2)</sup>	就業している	78(100.0)
	就業していない	0(0.0)
健康状態 <sup>2)</sup>	良い	71(91.0)
	悪い	0(0.0)
	どちらともいえない	7(9.0)

1) 平均値±SD 2) 実数(%)

C. 発達障害児（疑い含む）の育児の意識と抱える問題

意識に関する項目の平均値では、「あてはまる」3.0 を父親・母親共に上回っており、「育児に積極的に関わっている」、「可能な範囲で育児に関わろうと努力している」( $p < 0.001$ ) の 2 項目は有意差がみられ、父親群が低い傾向であった。ストレスに関する平均値では、父親は「あてはまる」3.0 を下回り、母親よりも平均値が低かった。「子どもの成長を感じられないことにストレスを感じる」、「配偶者との育児の方向性が異なることにストレスを感じている」、「我が子に対する社会の差別的意識にストレスを感じる」、「配偶者の育児が不十分なことにストレスを感じる」( $p < 0.05$ ) の 4 項目は有意差がみられ、父親群が低い傾向であった。不安に関する平均値では、父親は「あてはまる」3.0 を下回る項目が 2 項目、上回る

項目が3項目で、母親も同様の結果が示された。「子どもの今後の成長が不安に思う」、「子どもの就園・就学後の生活が不安に思う」、「将来自立した生活を送れるかどうか不安に思う」(p<0.05)の3項目で有意差がみられ、どれも父親群が有意に低かった。

(表2)

D. 発達障害児(疑い含む)の特徴・特性に関する認識

発達障害児(疑い含む)の特徴・特性として「コミュニケーションが取れない」「言葉が出ない」

「パターン化した行動がある」「感覚過敏」などすべての項目で、'あまりあてはまらない' 2.0を下回っており、2群間に有意差はみとめられなかった。(表3)

E. 発達障害児(疑い含む)の理解と対応

理解に関するすべての項目の平均値では、'あてはまる' 3.0を父親・母親共に上回っていた。「子どもが頑張っていることを知っている」(p<0.001)、「子どもの成長を促す関わりを心がけている」、「子どもの得意なことを知っている」など4項目(p<0.01)、「子どもに合わせた対応をとるように心がける」など2

表2 発達障害児(疑い含む)の育児の意識と抱える問題

		父親(N=78) (平均±SD)	母親(N=88) (平均±SD)	p値
意識	育児に積極的に関わっている	2.9 ± 0.70	3.3 ± 0.73	<0.000 ***
	可能な範囲で育児に関わろうと努力している	3.0 ± 0.47	3.5 ± 0.53	<0.001 ***
	父親/母親ならではの育児をしようという意識がある	3.0 ± 0.73	3.1 ± 0.78	0.139
ストレス	子供の成長を感じられないことにストレスを感じる	2.2 ± 0.90	2.4 ± 0.94	0.043 *
	子どもの困った行動に対してうまく対応できないことがストレスを感じる	2.9 ± 0.83	3.0 ± 0.86	0.097
	他の子と比較し我が子を否定的に思うことにストレスを感じる	1.9 ± 0.81	2.3 ± 0.94	0.206
	配偶者との育児の方向性が異なることにストレスを感じる	1.9 ± 0.81	2.1 ± 0.94	0.011 *
	ワークライフバランスがうまく保てないことにストレスを感じる	2.2 ± 0.94	2.4 ± 0.96	0.120
	我が子に対する社会の差別的意識にストレスを感じる	1.9 ± 0.82	2.2 ± 0.92	0.001 **
	自身が持つ発達障害への差別的意識にストレスを感じる	1.7 ± 0.71	1.8 ± 0.76	0.263
	配偶者の育児が不十分なことにストレスを感じる	1.6 ± 0.73	2.0 ± 0.93	<0.001 **
不安	子どもとの関わり方について不安に思う	2.2 ± 0.95	2.3 ± 0.98	0.147
	子どもの今後の成長が不安に思う	3.1 ± 0.80	3.2 ± 0.78	0.014 *
	自身の仕事による子どもへの影響が不安に思う	2.2 ± 0.99	2.1 ± 0.96	0.138
	子供の就園・就学後の生活が不安に思う	3.1 ± 0.86	3.0 ± 0.84	0.042 *
	将来自立した生活を送れるかどうか不安に思う	3.3 ± 0.85	3.4 ± 0.77	0.027 *

1) Mann-Whitney U検定 平均±SD p\*<0.05、\*\*<0.01、\*\*\*<0.001

2) とてもあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出

表3 発達障害児(疑い含む)のもつ特性に関する認識

	父(N=78) (平均値±SD)	母(N=88) (平均値±SD)	p値
対人関係のトラブルがある	1.9 ± 0.34	1.9 ± 0.29	0.442
コミュニケーションがとれない	1.5 ± 0.50	1.6 ± 0.49	0.182
言葉が出ない	1.5 ± 0.50	1.5 ± 0.50	0.771
パターン化した行動がある	1.7 ± 0.47	1.7 ± 0.48	0.918
不注意	1.8 ± 0.42	1.8 ± 0.42	0.886
こだわりが強い	1.5 ± 0.50	1.5 ± 0.50	0.274
意思疎通が困難	1.7 ± 0.47	1.7 ± 0.47	0.885
パニック	1.9 ± 0.34	1.8 ± 0.37	0.573
感覚過敏	1.8 ± 0.41	1.7 ± 0.45	0.311
集中力がない	1.6 ± 0.48	1.6 ± 0.49	0.831
集団行動がとれない	1.6 ± 0.48	1.7 ± 0.46	0.385
衝動性	1.8 ± 0.39	1.8 ± 0.42	0.448
多動性	1.6 ± 0.49	1.7 ± 0.48	0.667

1) Mann-Whitney U検定 平均値(±SD) P\*<0.05 \*\*<0.01 \*\*\*<0.001

2) とてもあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出

項目（ $p<0.05$ ）で有意差がみられ、どれも父親群が有意に低かった。発達障害児（疑い含む）への対応では、父親・母親共に‘あてはまる’3.0を上回ったのは、「子どもの好きな活動（感覚）を行う」の1項目であった。

「関心・注意を他に向ける」（ $p<0.05$ ）、「自らがその場を立ち去る」（ $p<0.05$ ）など2項目で有意差がみられ、どれも父親群の平均値が有意に低かった。

（表4）

#### Ⅳ. 考察

##### A. 父親の子どもへの関わり方や意識

父親の児の理解と心がけの平均値は、‘あてはまる’の3.0を超えており母親に比して平均値は低いが、父親なりに努力している姿が見受けられた。また、子どもの成長を促す関わりや子どもに合わせた対応をとろうとする心がけの差や、発達障害の特徴的な行動への対応状況の差から父親が母親に比して育児の困難さを抱えていることや、父親の発達障害児（疑い含む）の理解や児に対する心がけの不十分さがあることが読み取れた。

加えて、「父親の育児の不十分さ」や「夫婦間での育児の方向性の相違」によって母親がストレスを抱えていることも示された。これは、柏木らが日本の父親は諸外国と比較して子育てをする度合いも、

子どもと過ごす時間も最低レベルだが原因は働き方、労働事情を無視できない<sup>14)</sup>としている。本研究の対象である父親も全員が就業していることから同様の傾向にあると考えられる。

「可能な範囲で育児に関わろうと努力している」が‘あてはまる’の3.0を超えていた。しかし、父親は子どもを理解しようという心持があっても、十分に育児に関わる時間がとれず、子どもと関わる時間が長い母親に比較すると日常からの子どもの成長や理解が難しい状況にあることが読み取れた。

特徴への対応方法の平均値は、上記に比して父親・母親共に‘あてはまる’の3.0を下回っており、具体的な対応方法に苦慮している様子が伺えた。これは、定型発達児の父親と比較して、発達障害児の父親は障害の特性による関わりにくさや、できたという実感の持ちにくさに翻弄され継続して積極的な意識が保てない<sup>15)</sup>と言われていることから、父親にとって障害の理解や療育のスキルを学ぶ機会は重要である。実際、父親は社会的背景等により療育施設や医療施設等の専門家や専門機関とつながりにくく、発達障害の特徴に合わせた関わり方である「療育」の必要性を理解する機会や、「療育」を実施するためのスキルを学ぶ機会がないため、その獲得は困難であることが考えられる。父親が発達障害や療育の必要性を理解し、参加することは三原ら<sup>13)</sup>が示す

表4 発達障害児(疑い含む)の理解と対応

		父(N=78)	母(N=88)	p値
		(平均値±SD)	(平均値±SD)	
発達障害児(疑い含む)の理解と心がけ	子どもが喜ぶことを知っている	3.3 ± 0.55	3.5 ± 0.55	0.011 *
	子どもが頑張っていることを知っている	3.2 ± 0.68	3.5 ± 0.57	<0.000 ***
	子どもの得意なことを知っている	3.1 ± 0.72	3.4 ± 0.70	0.005 **
	子どもの好きな物等を知っている	3.4 ± 0.63	3.6 ± 0.54	0.009 **
	子どもの頑張りや努力を誉めてあげたいと思う	3.6 ± 0.55	3.8 ± 0.45	0.001 **
	子どもの成長を促す関わりを心がけている	3.1 ± 0.66	3.4 ± 0.60	0.001 **
	子どもに合わせた対応をとるように心がけている	3.1 ± 0.56	3.3 ± 0.58	0.029 *
	子どもを理解しようと努力している	3.4 ± 0.56	3.5 ± 0.59	0.110
発達障害児(疑い含む)の特徴への対応方法	叱責する	2.5 ± 0.98	2.8 ± 0.86	0.051
	体罰を与える <sup>a)</sup>	1.7 ± 0.85	1.7 ± 0.80	0.780
	関心・注意を他に向ける	2.6 ± 0.87	3.0 ± 0.77	0.013 *
	子どもが嫌いな活動(感覚)等から逃れさせる	2.5 ± 0.83	2.6 ± 0.82	0.579
	子どもが好きな活動(感覚)を行う	3.0 ± 0.79	3.0 ± 0.58	0.826
	気を引く行動であれば無視をする	2.0 ± 0.77	2.2 ± 0.83	0.068
	自らがその場を立ち去る	1.6 ± 0.65	2.0 ± 0.90	0.005 **

1) Mann-Whitney U検定 平均値(±SD)  $p<0.05^{**}<0.01^{***}<0.001$

2) とてもあてはまる4点～あてはまらない1点の4件法で算出

a) 反転項目

とおり、母親のストレス軽減や育児の中での抑うつ感情が軽減され育児意欲にもつながることが予測され、発達障害児（疑い含む）を支える家族の基盤強化につながるため、父親の発達障害児の育児の知識や理解、実際の関わり方のスキルを獲得し育児に参加できるような支援の必要性が高いと言える。

発達障害児の特徴・特性に関する認識の平均値は、父親・母親共に‘あまりあてはまらない’の2.0を下回っており、かつ2郡間の平均値もほぼ同様であることから、特徴・特性の認識には差がないという結果であった。しかし、実際の対応に相違がみられることや、子どもと接する時間が長い母親の方が、子どもの特徴・特性に直面する機会が多いため、特徴・特性の認識は異なる可能性が高い。結果の背景には発達障害に関する理解が不十分であることや、子どもの障害受容ができていないことが予測されるため、今後、十分な検討を要する。

## B. 父親に必要な支援

厚生労働省の調査<sup>16)</sup>や内閣府の調査<sup>17)</sup>によると、6歳未満の子どもを持つ父親たちが平日に子どもと過ごす時間は平均2～4時間未満といわれ、前回調査と比較すると、時間は増えているものの、先進国中最低の水準である。

このことから、対象者のほぼ全員が就業しているため、限られた時間の中で子どもと関わっていることが考えられる。現在、育児に参加する時間確保のための体制整備として、厚生労働省主幹で実施されている「育MENイクメンプロジェクト」<sup>18)</sup>の推進や、内閣府が策定した「子ども・子育てビジョン」<sup>19)</sup>によって、父親自身の意識改革だけでなく、企業・組織の意識や仕組みの改変、父親のワークライフバランスの見直しを進めるなど、社会全体における仕組みづくりが必要とされる。加えて、父親のライフスタイルや特性<sup>11) 20)</sup>を考慮し、インターネットやSNSを利用した手軽でかつ確実な発達障害児の育児不安の解消ツールや療育の理解を深める取り組みを行うことも有効な支援の一つとして考える。

実際、調査協力施設では、その施設を利用する児の父親のみ参加者として、子どもとの関わり方のポイントや、発達障害の理解を促す「お父さんの学習会」という企画を定期的実施していた。企画の効果として、父親自身と子どもとの関わり方を見直す機会となり、参加した父親は少しずつ自信をもって子育てに取り組むという変化が見られた。その結

果、子どもの成長が促され、母親の精神面が安定するなど父親たちが子どもや家族とうまく付き合うための方法を学ぶ機会の一例といえる。

しかし、一方で参加したくてもできない状況の父親も多いことや、仲間づくりが苦手に参加できない等が課題であり、限られた時間や父親個人の特性に合わせて、手軽に情報を得て学べる方法としてインターネットやSNSの利用による育児に関する不安や疑問を解消できる体制を整備し、充実させる必要性は高い。

また、父親のニーズ<sup>11)</sup>にもあるように、父親同士の交流の機会を充実させ、ピアサポートによる精神的ケアも必要と考え、父親同士のつながりをより手軽に行える方法について検討する必要性が高い。障害者総合支援法では、相談支援事業の充実を図る目的として専門家から当事者家族へ提供する事業を多く展開している<sup>21)</sup>が、当事者の家族同士の支え合いに関する事業は、まだ不十分であると言えるため、体制整備が急務である。

## V. 研究の限界と今後の課題

本調査において、調査対象が少数であることから、多様な育児状況について把握が不十分である。その結果、他の課題が見出せる可能性や、他の支援ニーズがある可能性が高いことが指摘される。加えて、回収率が低いことにより未回収バイアスが生じている可能性が高いことが指摘される。また、父親と母親間の相違によって生じるストレスや、そのストレスの蓄積度合い、解消法の有無など詳細に調査することで、父親が加害者となる場合の虐待防止支援を検討する必要も高く、今後は、より多くの発達障害児を育児する父親・母親の状況を調査する必要がある。そのためにも、療育施設や専門職の理解を得て、調査への協力を募り、より多くの対象を調査するなど、一般化を検討する必要がある。

## VI. 結語

発達障害児（疑い含む）の父親は社会的背景において、子どもの理解だけでなく、発達障害の理解や療育の必要性・実施のためのスキルが十分に得られない状況が予想された。それに対し、社会全体の体制整備に加え父親のライフスタイルや特性に合わせた取り組みが急務である。

## Ⅶ. 利益相反

本研究に関連し、開示すべき利益相反はない。

本研究は、科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）（課題番号 25893083）による助成金を受けて行った研究の一部である。また、本研究の要旨は、第 13 回信州公衆衛生学会（2018 年 8 月）で発表した。

## Ⅷ. 文献

- 1) 今井充子, 常盤洋子: 我国の行政による子育て支援の視点と課題に関する文献検討. 北関東医学雑誌 6 (3): 377-386. 2011.
- 2) Jellet, R., Wood, C.E., Giallo, R., et al.: Family functioning and behavior problems in children with Autism Spectrum Disorders: The mediating role of parent mental health. *Clinical Psychologist* 19 (1): 39-48. 2015.
- 3) 内閣府: 平成 29 年版障害者白書. 第 2 編障害者支援の充実に向けた動き. 第 2 節発達障害者支援法の改正. 30-33. 2018.
- 4) 岡野維新, 武井祐子, 寺崎正治: 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスと父親に対するサポート. *川崎医療福祉学会* 21 (2): 218-224. 2012.
- 5) 小尾栄子, 文殊紀久野: 広汎性発達障害児を育てている家族への支援 第一報～山梨県下で保健師が行う乳幼児期支援の実際から～. *小児保健研究* 70 (5): 637-645. 2011.
- 6) 亀崎明子, 田中満由美, 前本京, 他: 未就学児を持つ父親の育児困難感の実態と関連要因の検討. *母性衛生* 59 (2): 383-389. 2018.
- 7) 兼松百合子: PSI 育児ストレスインデックス手引 2 訂版. 124-126. 一般社団法人 雇用問題研究会. 2015.
- 8) 津田芳見: 高機能広汎性発達障害幼児とその親へのペアレントトレーニングによる効果の検討. *小児保健研究* 71 (1): 17. 2012.
- 9) 中山かおり: 就園前の発達障害の特徴をもつ子どもの保護者のための個別育児支援プログラムの効果. *日本地域看護学会誌* 15 (3): 46. 2013.
- 10) Dabrowska, A., Pisula, E.: Parenting stress and coping styles in mothers and fathers of pre-school children with autism and Down syndrome. *J. Intellectual Disabil Res.* 54 (3): 266-280. 2010.
- 11) 石田史織, 高橋宏子, 五十嵐久人: 療育センターを利用する発達障害児の成長を支える父親の役割. 第 38 回長野県看護研究学会論文集: 7-10. 2018.
- 12) 山下亜紀子: 発達障害児の母親が抱える生活困難についての研究. *日本社会精神医学会雑誌* 22 (3): 245. 2013.
- 13) 三原博光, 松本耕二: 障害児の父親の生活意識の検証 - 障害児の年齢、出生順位、妻の仕事の有無に着目して -. *社会福祉学* 53 (2): 114-115. 2012.
- 14) 柏木恵子: 父親になる、父親をする - 家族心理学の視点から -. 23-24. 岩波書店. 2011.
- 15) 今西良輔: 父発達障害児を育てる父親の生活体験 - 3 人の父親と息子達の歩み -. *北海道医療大学看護福祉学部会誌* 9 (1): 27-34. 2013.
- 16) 厚生労働省: 第 7 回 21 世紀出生児縦断調査報告書.  
online: <http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/syusseiji/07/kekka3.html>
- 17) 内閣府: 6 歳未満の子供を持つ夫の家事・育児関連時間 (1 日当たり・国際比較).  
online: <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/ottonokyouryoku.html>
- 18) 厚生労働省 online: 育 MEN イクメンプロジェクトホームページ <https://ikumen-project.mhlw.go.jp/>
- 19) 内閣府: 「子ども・子育てビジョン」(概要)

online : <https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/family/vision/pdf/gaiyo.pdf>

- 20) 関根剛, 間三千夫, 室みどり: 父親の育児支援に影響を与える要因について. 和歌山信愛女子短期大学紀要 (40) :35-40. 2003.
- 21) 二本柳覚, 鈴木裕介, 他: これならわかる障害者総合支援法第2版. 10-11. 翔泳社. 2018.

**Parenting of children with developmental disorders receiving medical treatment and education: Comparative survey study of fathers and mothers**

Shiori Ishida, Hiromi Okuno, Hisato Igarashi, Hiroko Takahashi, Akemi Yamazaki

*Department of Public Health Nursing, Shinshu University School of Health Sciences*

**Purpose:** Clarify the differences between fathers and mothers regarding parenting condition and attitudes towards children with developmental disorders for consideration of greater paternal support.

**Methods:** A total of 186 parents (78 fathers and 88 mothers) of children using infant rehabilitation facilities in Nagano prefecture were enrolled for comparisons of survey results on 45 items related to childcare awareness and parenting problems for children with developmental disorders.

**Results:** Compared with mothers, fathers scored significantly lower in the survey domains of parenting and problems for children with developmental disorders (9 items) , understanding children with developmental disorders (7 items) , and communicating with children with developmental disorders (2 items) (all  $p < 0.05$ ) . No remarkable differences were seen for items related to effort or intention between fathers and mothers.

**Conclusion:** Although fathers tried to understand children with developmental disorders as much as mothers, many had insufficient rehabilitation understanding and skill. Improved training programs that consider the lifestyles and parenting challenges of fathers are urgently needed.

---